



非薬物療法における認知症者の認知機能障害の改善及びBPSD（認知症の行動・心理症状）の改善の研究

保健福祉学部 作業療法学科
教授 小池 好久（こいけ よしひさ）



連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 2506 号室

Tel 0848-60-1212 Fax 0848-60-1212

E-mail koike@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野： 認知障害治療学
精神障害治療学

キーワード： 非薬物療法

● 現在の研究について

現在の日本における認知症者の総数は300万人を超えていると試算されています。しかし、その方達の中には、例えば高齢により脳の血流が滞ったことで、注意機能障害がおこり、その為に認知機能に悪影響が及んでしまった方や、抑うつやアパシー（無気力症）などによる活力の低下で、認知機能に悪影響が及んでしまった方などが多数含まれているように見受けられます。この方達の症状を放っておくと、認知障害が徐々に進行してしまい、最終的には脳全体にダメージを与えてしまつて重篤な認知の障害に至ります。

そこで、このような方達の認知機能の改善や心理症状の改善を、薬を使わずに、心地よい刺激を伴った非薬物療法を用いて改善を試みる研究を現在行っています。以下に、2つの非薬物療法の効果を提示します。

①振動音響療法

この研究に同意を得た心理的に不安定（抑うつや混迷等）な老健入所者を対象に、振動音響療法を2週間施行した結果、睡眠時間（過眠）の改善及び、抑うつの改善が見られた。

研究結果掲載論文；

Effect of Vibroacoustic Therapy on elderly nursing home residents with depression. J. Phys. Ther. Sci. 2012.

②スチーム・フット・スパ

この研究に同意を得た老人病院入院患者を対象に、スチーム・フット・スパを行った所、認知機能の改善が見られた。また心不全の改善効果が期待されることが示唆された。

研究結果掲載論文；

Effect of steam-foot-spa on geriatric hospital patients with cognitive function:A pilot study. Clin Interv Aging. 2013

● 今後進めていきたい研究について

提示している研究はどれも先行研究にすぎません。今後は一般の方でも容易に使用でき、認知機能及び心理症状の改善を図れるように、研究データの蓄積を図り、対象者個々の認知機能・心理症状により適合する非薬物療法の使用方法の開発が必要になります。

また、認知症の方は、多くの合併症（例えば高血圧や心不全）を抱えていらっしゃると思いますが、それら合併症の改善が、認知機能や心理症状を改善につながる事が予想されます。それら合併症もターゲットとした非薬物療法の開発が必要になります。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

老健の入所者の方の、約50%が高血圧疾患、約20%が心不全疾患、約18%が糖尿病疾患という事例が示されています。上述のこれらの疾患のなかには、認知症のリスクファクターとなる疾患も含まれており、この方達の多くに二次障害としての認知機能の低下が予想されます。できれば、理解ある老健との連携を進めてゆき、認知機能の改善につなげられたらと考えています。